

# 水 稲

## 早植の収穫・乾燥と普通植・晩植の後期管理

### ◆早期・早植栽培

#### ○ 収穫

8月は、局地的大雨や高温傾向はあったものの、台風の被害もなく、比較的順調に生育しました。

穂揃い期(8割以上の穂が止め葉から出た頃)から成熟期までは、平均気温の積算で約1000℃とされていますので、8月下旬頃～9月上旬が刈取時期となります。刈取適期は穂の熟度を見て行います。穂軸が緑色で、穂の基部に近い籾に青味が残るものが7～10粒残るぐらいが刈取時期です。

刈取後は速やかに乾燥行程に移す必要があります。乾燥機の能力に合わせて収穫しましょう。

なお、土質や天候にもよりますが、作業性を優先して早期落水を行うと、ほ場が乾きすぎて籾の充実が悪くなります。収穫日を考えながら乾きすぎた場合には、走り水で水分を補いましょう。

#### ○ 乾燥・調製

乾燥機の送風温度は、胴割れ米を防ぐために40℃以下に、穀温は35℃以下となるようにします。

また、時間当たり乾減率は0.6%までにします。急激な乾燥は品質低下に繋がったり、上乾きによる水分戻りが生じたりするので避けましょう。

出荷する米は、水分15%未満に乾燥の上、肌ずれしないように、籾すりは穀温が外気温と同じまで冷めてから行います。ライスグレーダーや色彩選別機等で丁寧に仕上げてください。

#### ○ 農作業安全

コンバインでの収穫作業など、暑い日中の作業となりますので、水分補給や十分な休憩で体調管理に気を付けましょう。

また、回転部分への巻き込みや機械からの転落、自動車の運転ミスなど事故が無いよう、農作業安全には十分注意を払いましょう。

### ◆普通植・晩植栽培

#### ○ 害虫の防除

苗の大きさや、移植日にもよりますが、ヒノヒカリは8月下旬～9月上旬に出穂する見込みです。

斑点米カメムシは全国的に多発傾向で、京都府でも全域に注意報が出されています。例年にも増して、しっかりとした対策を心掛けましょう。

カメムシの田への飛び込みを減らすため、ほ場周辺の草刈りは出穂の10日前までには済ませるようにします。薬剤防除は、傾穂期(穂が傾きかける時期)に行います。特にカメムシが多く見られる場合は、傾穂期防除の前に、穂揃い期にも防除をすると、より効果的です。

近年、大きな被害を受けたトビイロウンカは、京都府病虫害防除所の調査では、7月末現在では予察灯飛来、圃場発生とも認められていませんが、最新情報に注意してください。

#### ○ 病気の防除

葉いもちが発生して進行が止まっていないほ場や、山間地などで毎年穂いもちが発生しているほ場では、薬剤の使用時期に注意して早めに粒剤等で防除します。また、近年増加している紋枯病は、すでに発生を見た田や毎年被害が発生する田では薬剤防除を心掛けましょう。

#### ○ 栽培管理

出穂前後は、稲に一番水が必要な時期です。このため、穂揃いまでは湛水、または掛け流しで管理します。その後は根の活性を維持するために、間断灌漑または掛け流しを基本とします。落水は田の条件によりますが、刈取の1週間前頃にします。

刈取時期は、9月下旬から10月上旬になる見込みです。高温傾向で、例年より早くなる可能性があります。ほ場を見回って適期収穫をお願いします。

# 野菜

## 秋野菜の留意事項と主な病害虫

8月下旬から10月上旬は年間で病害虫の発生が最も多い時期です。8月中旬は局所的なゲリラ豪雨に見舞われました。今後も、台風の襲来や大雨に備えて対策をしておくことが重要です。

### ◆台風・大雨対策

**施設** ①排水溝・排水路の清掃 ②損傷個所の補修 ③マイカー線等の締直し ④アンカーの補強 ⑤ハウス筋交の点検 ⑥横風(南東風)へのハウス内部の補強策の準備をしておきます。

**露地果菜類** ①吊り棚の支柱の点検・補強 ②残渣の持ち出し処分 ③排水対策(畝溝・排水溝・水路) ④暴風ネットの補強 ⑤直前の収穫徹底 等です。

**露地葉根菜** ①防虫ネット・寒冷紗被覆と押えの強化 ②排水対策の徹底 ③播種・幼作物の寒冷紗等被覆による雨滴防止と風による飛散防止の押え固定の徹底です。

### ◆秋野菜の留意事項

ネギ ホウレンソウ 小松菜 みず菜 キャベツ ハクサイ 花菜 ダイコン シュンギクの播種や定植は8月下旬から9月を中心に10月前半まで、収穫予定から溯って年内採りから作付けます。

近年はこれら野菜の作付け時期が高温の影響で後へずれる傾向がある一方、秋が短くなり生育量が不足する傾向があります。

高温・強日射を被覆遮光により回避して、8月後半の玉菜類から苗づくりを行い、9月前半には定植し、12月前半までに75～90日の生育日数を確保することで年内収穫が可能になります。直播野菜にあっても同様に被覆資材を活用して栽培日数を確保します。

被覆資材により1～3℃程度下げられ、降雨時の叩きも防げます。栽培場所の環境改善と併せて、適正管理に努めてください。

気候変動の進む中、これまでとおりででは作物が育たなくなる恐れがあります。実行した結果を記録に残し、今後の栽培改善に活かしてください。

なお、生育初期の灌水で、地温が下がり切らない状態で行う場合は、チューブ灌水を避け、ホース灌水で一気に地温を下げるのが重要です。

**◆病害虫対策** 葉根菜類の病害虫は共通病害虫が多いので早期発見初期防除が重要です。特にヨトウムシ類は葉裏に産卵し、若齢期は葉裏で食害するので発見が遅れやすいため、よく観察して早期発見・初期防除に努めてください。

表 秋野菜の主な病害虫

野菜共通害虫	ネギ等
ネキリムシ類	ネギアザミウマ
アブラムシ類	ネギハモグリバエ
ヨトウムシ類	シロイチモジヨトウ
ハスモンヨトウ	ネギコガ ネダニ
<b>あぶらな科野菜</b>	えそ条斑病 べと病
キスジノミハムシ	さび病 黒斑病
コナガ アオムシ	<b>ホウレンソウ 等</b>
ハイマダラノメイガ	ミナキイロアザミウマ
タマナキンウワバ	ヤギシロトビムシ
カブラハバチ	ハダニ類 コナダニ
べと病 白斑病	べと病 斑点病
黒斑病 黒腐病	<b>シュンギク 等</b>
黒斑細菌病	ハモグリバエ類
	炭そ病 べと病 葉枯病

## TAC 巡回現場より ～酸素のチカラで異常気象を乗り切る～

近年の異常気象により梅雨の長雨、夏の猛暑、ゲリラ豪雨、台風など自然災害に見舞われることが多くなっています。巡回先のほ場でも、これらの災害による湿害などによる根傷み、土壌の状態が整わないことによる定植遅れ、活着不良などに苦心される事が増加しています。

そのような場合に効果があると注目を浴びているのが酸素供給剤です。

酸素供給剤は水と反応して酸素を発生することで土壌中の酸素欠乏を防ぎ、根の活性を高めるという効果が期待できます。

現在、タキイ種苗株式会社からは、持続期間別に商品が発売されていて、  
元施用型：約5か月持続タイプ「オキソパワー5」、約3か月持続タイプ「ネオカルオキソ」  
追肥即効型：約1か月持続タイプ「オキソダッシュ1」、即効性液肥タイプ「MOX」があります。

酸素供給剤では土壌の排水性自体が向上するわけではありません。

基本となるのは土づくりや排水対策で、これらを十分に行い、健全な土壌づくりを心掛けてください。

# 茶 樹

## 来年の一番茶に向けた栽培管理

### ◆秋整枝

自然仕立て・・・10月下旬になると茶の生育は停止します。この頃以降、枝条の上から3葉目で摘心すると、翌年一番茶の芽揃いがよくなります。また、冬季の凍害も抑制できます。

機械摘み仕立て・・・10月下旬に秋整枝をしますが、早すぎると再萌芽し、冬季障害を受けやすく、また、翌年一番茶の品質に悪影響があります。目安として、平均気温が18℃を下回った頃に整枝をするとよいでしょう。「おくみどり」は再萌芽しやすい品種ですので、整枝時期には注意が必要です。

機械摘みは整枝位置を低くし(深く)すると芽数型に、高く(浅く)すると芽重型になります。

目的の茶種に合わせて調節しましょう。葉層は10 cm以上確保したいところです。

### ◆施肥

茶樹の芽は9月から伸長し始め、11月にかけて肥料を吸収する根の量が増加します。茶樹が効率よく肥料成分を吸収できるよう、また、根への濃度障害や雨による窒素成分の流亡を避けるため、分施に努め、1回当たりの施肥量は、窒素成分で15kg/10a以下とします。

9月から施用し始め、遅くとも11月中旬には終えましょう。遅効きすると耐寒性が弱くなります。

### ◆病虫害防除

翌年一番茶に向けて、病虫害の発生を抑制するため、秋の防除は重要です。ほ場をよく観察し、登録薬剤を正しく用いて防除しましょう。

害虫によっては、薬剤が効きにくい場合があります。例えば、チャノキイロアザミウマではネオニコチノイド系合成ピレスロイド系薬剤が効きにくい場合があります。このような場合は、他系統の薬剤を使用し、同系統を続けて使わないようにしましょう(ローテーション散布)。